

古文ドリル：「す・さす・しむ」（使役・尊敬）100問

対象：高校生・大学受験生 著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太

はじめに：「す・さす・しむ」の2用法

「す」「さす」「しむ」は古文の助動詞で、**2つの意味**を持つ。

用法	訳	判別ポイント
① 使役	～させる	動作主が別の人
② 尊敬	お～になる	主語が高貴＋下に尊敬語＋させる相手がない

接続

- ・ **す**：四段・ナ変・ラ変の **未然形**
- ・ **さす**：その他の **未然形**
- ・ **しむ**：すべての動詞の **未然形**（漢文訓読体が多い）

活用はどれも下二段型（す：せ・せ・す・する・すれ・せよ／さす：させ・させ・さす・さする・さすれ・させよ／しむ：しめ・しめ・しむ・しむる・しむれ・しめよ）。「たまふ」「けり」「つ」の上の「せ・させ・しめ」は **連用形**。

識別の鉄則

1. 下に尊敬語（給ふ・おはします）＋主語が高貴＋させる相手がない → 尊敬の二重敬語
2. 動作主が別の人（させる相手がいる） → 使役（下に尊敬語があっても使役）
3. 下に尊敬語がない → ほぼ確実に使役

「せたまふ」「させたまふ」「しめたまふ」は **二重敬語の典型の形**。ただし、させる相手がいれば使役＋尊敬になる。

二重敬語の見分け方

尊敬の二重敬語： - 主語が帝・中宮・東宮・摂関大臣など最高位 - 下に「給ふ」「おはします」が続く - させる相手（「人に」「人をして」）がなく、主語が自分で動作する - 訳：「お～になる」「～なさ

る」

使役： - 主語が高貴でも、動作主が下の人 - 例：「家臣に書か**せ**たまふ」 → 家臣が書く（使役）
→ 文脈で動作主を見極めることが重要。

🎯 解き方のコツ（時短テクニック）

上の「識別の鉄則」は、文法の理屈にそった見分け方。
こちらは **試験本番ですばやく答えを出す** ための実戦テクニックです。

コツ① 「す／さす／しむ」の直後に尊敬語があるか をまず見る

- ・ 直後が「給ふ／おはす／たまふ／おはします」 → **尊敬の可能性大**（二重敬語）
- ・ 直後が **尊敬語以外**（句点・助動詞「けり・つ・たり」・接続助詞「て」など） → **使役で確定**
「～させる」
- ・ 下に尊敬語がなければ、これだけで答えが決まる（ただし「～せば…まし」の「せ」は過去「き」の未然形。下の「よくある引っかけ」を参照）。

コツ② 尊敬語が下にあっても 動作主 を見て使役か尊敬か決める

- ・ 「**せ給ふ／させ給ふ／しめ給ふ**」が出てきたら、**主語＝動作主** か確認
- ・ 帝・中宮・東宮が **自分で** 動作している → **尊敬の二重敬語**「お～になる」
- ・ 主語は貴人だが、別の人（家臣・女房）に **やらせている** → **使役+尊敬**
- ・ 「○○に書か**せ**たまふ」のように、させる相手を表す「**(人) に**」「**(人) をして**」があれば使役確定。ただし「御車に乗らせたまふ」「内裏に参らせたまふ」の「に」は場所・行き先、「女房に琴を教ふ」「神に祈る」の「に」は教わる相手・祈る相手で、させる相手ではない。「みづから」があれば、主語が自分で動作している（尊敬）。
- ・ 「**馬を**走らせたまふ」のように、自動詞（走る・眠る・住む・遊ぶ など）の動作をする人・物が「～を」で書かれていれば、それがさせる相手（使役）。「御階を上る」の「を」は通る所で、させる相手ではない。

コツ③ 「しむ」は 漢文訓読体 の合図

- ・ 「しむ」を見たら出典が **漢文訓読・記録体・軍記** の可能性が高い。
- ・ 訳語は基本「使役」優先。「しめたまふ」でも、させる相手（～をして・～に）がなく、高貴な主語が自分で動作するときだけ尊敬（最高敬語）。

コツ④ 二重敬語が成立する 主語の位置 を覚える

- ・ 天皇（帝・上〈うへ〉）・上皇（院）・中宮・后・東宮 → **二重敬語の対象**

- ・ 摂関・大臣も対象になるが、文脈で「特別な尊敬」かを判断
- ・ 地の文では、それより下の貴族（大将・中納言など）に二重敬語はふつう使わない → 「せたまふ」は **使役** + 「たまふ」（その人への尊敬）で訳す

試験本番でのチェック順序

1. 直後に **尊敬語（給ふ・おはします）** があるか確認
 2. なければ → **使役で確定**（「～せば…まし」の過去「き」は別）
 3. あれば、させる相手（「人に」「人をして」、自動詞の動作をする「～を」。場所・行き先や教わる相手などの「に」は別＝コツ②）がいるか見る → いれば **使役**（「たまふ」は、させる側の主語への敬意）
 4. いなければ主語を見る → **最高位の貴人で自分が動作している** → 尊敬の二重敬語
- この順番で見れば、すばやく答えが出ます。

よくある引っかけ

- ・ 「**仰せらる**」は「仰す」自体が尊敬語で、その後の「らる」も尊敬。「す・さす」とは別物
- ・ 「**せ給ふ**」が必ず二重敬語とは限らない → 動作主が別人なら使役＋尊敬
- ・ 「**しめ給ふ**」は漢文系の文に多い形。させる相手（「～をして」など）がいれば使役＋尊敬、いなければ二重敬語。和文ではあまり見ない
- ・ 「**思す（おぼす）**」「**仰す（おほす）**」は **一語の尊敬動詞** で「す・さす」ではない
- ・ 「**御覧ぜさす**」は「御覧ず（ご覧になる）」＋使役「さす」で「お見せ申し上げる（お目にかけらる）」。「尊敬ではない」
- ・ 「せ」には、サ変動詞「す」の未然形（「物語**せ**させたまふ」）や、過去「き」の未然形（「～**せ**ば…まし」）もある。サ変の未然形は「せ」なので、サ変動詞には「～せさす」「～せしむ」の形で付く

採点表

- ・ 基礎（Q1～Q20）： /20
- ・ 標準（Q21～Q50）： /30
- ・ 応用（Q51～Q80）： /30
- ・ 入試レベル（Q81～Q100）： /20
- ・ 合計： /100

【第1部】基礎編（Q1～Q20）

二重敬語の典型／単純使役を識別する基礎問題。

Q1. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

主、家臣に物を取ら**せ**たまふ。

Q2. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、御文を書か**せ**たまふ。

Q3. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

中宮、つれづれとながめ**させ**たまふ。

Q4. 次の傍線部「しむ」を識別せよ。

母、子に念仏せ**しむ**。

Q5. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、御心を静め**させ**たまふ。

Q6. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

翁、童に水を汲ま**せ**けり。

Q7. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、出で**させ**たまふ。

Q8. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

親、子に書を学ば**しめ**けり。

Q9. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中納言、女房に御返り書か**せ**たまふ。

Q10. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

主、馬を走ら**せ**たまふ。

Q11. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

神、雨を降ら**せ**たまふ。

Q12. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、嘆か**せ**たまふ。

Q13. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

子を眠ら**せ**たまふ。

Q14. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、御琴弾か**せ**たまふ。

Q15. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

朝廷、僧を召さ**せ**たまふ。

Q16. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、花の宴を楽しま**せ**たまふ。

Q17. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

老人、子を殿に仕へまつら**せ**たり。

Q18. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、御物の怪に苦しま**せ**たまふ。

Q19. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、御階を上ら**せ**たまふ。

Q20. 次の傍線部「さす」を識別せよ。

兄に弟を慰め**さす**。

【第2部】 標準編（Q21～Q50）

動作主の判別、敬意の方向、複合動詞下接など。

Q21. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、女房に歌詠ませたまふ。

Q22. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、御車に乗らせたまふ。

Q23. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

后、女房に御簾を上げさせたまふ。

Q24. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

院、御前の庭におりさせたまへり。

Q25. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

帝、群臣をして政を執らしめたまふ。

Q26. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、御涙を流させたまふ。

Q27. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

主、舎人に火をともさ**せ**たまふ。

Q28. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、僧をして経を読ま**せ**たまふ。

Q29. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

上、夢覚め**させ**たまふ。

Q30. 次の傍線部「しむ」を識別せよ。

子弟をして学を好ま**しむ**べし。

Q31. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、いみじう物思は**せ**たまふ。

Q32. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

親、子に物言は**せ**つ。

Q33. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、人々に酒を飲ま**せ**たまひて、みづからも歌詠ま**せ**たまふ。

Q34. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、内裏に参ら**せ**たまふ。

Q35. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、笛吹か**せ**たまふ。

Q36. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、人をして文ばこを持た**せ**たまふ。

Q37. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、御簾の内に入ら**せ**たまふ。

Q38. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

后、僧に祈祷せ**させ**たまふ。

Q39. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

人をして書か**しめ**たまふ。

Q40. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、月を御覧じて、ひとりごた**せ**たまふ。

Q41. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

上、楽人に楽奏で**させ**たまふ。

Q42. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

大臣、牛飼に御車寄せ**させ**たまへり。

Q43. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、女房に御髪梳ら**せ**たまふ。

Q44. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

院、御目開け**させ**たまふ。

Q45. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

帝、みづから国を治め**しめ**たまふ。

Q46. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

主、馬を引か**せ**けり。

Q47. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、女房たちを御前に候は**せ**たまふ。

Q48. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

中宮、御簾のもとにゐざり出で**させ**たまふ。

Q49. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

母君、姫君に手を習は**せ**たまふ。

Q50. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、御覧じて、うち笑は**せ**たまふ。

標準編 / 30

【第3部】 応用編 (Q51~Q80)

文脈で動作主を判定する応用問題、複合動詞・サ変動詞に付く形、源氏物語の本文。

Q51. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、月を愛で**させ**たまふ。

Q52. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

院、人々をして御遊び始め**させ**たまふ。

Q53. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

中宮、御物語せ**させ**たまふ。

Q54. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝の御使ひに侍り**せ**ば、かくはあらざらまし。

Q55. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、御身浄め**させ**たまふ。

Q56. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

母、子の手を引か**せ**つ。

Q57. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

主君、家臣に城を築か**しめ**たまふ。

Q58. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、御涙さしぐま**せ**たまふ。

Q59. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

大将、隨身に人々を呼ば**せ**たまふ。

Q60. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、人をして御文届け**させ**たまふ。

Q61. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、物音にいみじう驚か**せ**たまふ。

Q62. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、御文を取り出ださ**せ**たまふ。

Q63. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、御酒にいたく酔は**せ**たまふ。

Q64. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、みづから若き女房に琴を教へ**させ**たまふ。

Q65. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

御乳母に若宮を抱か**せ**たまふ。

Q66. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、宴を催さ**せ**たまふ。

Q67. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

上、蔵人に、かの童を御前近く呼び寄せ**させ**たまふ。

Q68. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

院、御念誦せ**させ**たまふ。

Q69. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

主、童に文届け**させ**たり。

Q70. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

上、御袖を顔に押し当て**させ**たまふ。

Q71. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

国王、神に祈ら**せ**たまふ。

Q72. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

大臣、舞人に舞は**せ**たまふ。

Q73. 次の傍線部「さす」を識別せよ。

かの贈り物御覧ぜ**さす**。(源氏物語・桐壺)

Q74. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

帝、近臣をして御使ひに行か**しめ**たまふ。

Q75. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

命婦は、まだ大殿籠ら**せ**たまはざりけると、あはれに見たてまつる。(源氏物語・桐壺)

Q76. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、童を御前に遊ば**せ**たまふ。

Q77. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、御物思ひ晴らさ**せ**たまふ。

Q78. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、御輿に乗り換へ**させ**たまふ。

Q79. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

東宮、御涙ぬぐは**せ**たまふ。

Q80. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、女御を御所に住ま**せ**たまふ。

応用編 / 30

【第4部】入試レベル (Q81~Q100)

入試レベルの文脈判定・敬語の重なり (最高敬語)・誤読しやすい問題。

Q81. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上は、いと思しめし嘆かせたまふ。

Q82. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

大臣、御使ひを急ぎ宮中へ参らせたまふ。

Q83. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

大臣、御娘を入内せさせたまふ。

Q84. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、夜もすがら思ひ明かさせたまふ。

Q85. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

母宮、若宮を湯浴みせさせたまふ。

Q86. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

中宮、御乳母をして御文奉らせたまふ。

Q87. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院は、世の中を心憂く思しめして、しばし御寺に籠もらせたまへり。

Q88. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、御位を譲ら**せ**たまひぬ。

Q89. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

大将、人をして御消息伝へ**させ**たまふ。

Q90. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

後の宮、いとめでたく見え**させ**おはします。

Q91. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

帝、公卿をして御階を上ら**しめ**たまふ。

Q92. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

院、姫君を御膝に乗せ**させ**たまふ。

Q93. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

帝、池の鯉を女房に養は**せ**たまふ。

Q94. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

上、御心地悩ま**せ**たまふ。

Q95. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

大臣、家司どもに、賀茂詣での御設けを急が**せ**たまふ。

Q96. 次の傍線部「せ」を識別せよ。

院、いみじう泣か**せ**たまふ。

Q97. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

大臣、人々に殿のしつらひを改め**させ**たまふ。

Q98. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

院、家人に御琴のしらべ整へ**させ**たまふ。

Q99. 次の傍線部「しめ」を識別せよ。

帝、石清水に行幸せ**しめ**たまふ。

Q100. 次の傍線部「させ」を識別せよ。

帝、この歌を聞こしめして、いみじう感ぜ**させ**たまふ。

入試レベル / 20

採点振り返り

セクション	配点	得点
基礎 (Q1～Q20)	20	
標準 (Q21～Q50)	30	
応用 (Q51～Q80)	30	
入試 (Q81～Q100)	20	
合計	100	

- 80点以上：完璧。源氏物語の最高敬語も読める
- 60～79点：標準合格レベル
- 40～59点：基礎は固まっている。応用編を反復
- 39点以下：「せたまふ」「させたまふ」の二重敬語パターンを再確認

あとがき

「す・さす・しむ」識別の核心： - 二重敬語「せたまふ」「させたまふ」は古文の最頻出 - 主語が高貴+下に尊敬語+動作主が同じ → 尊敬 - 動作主が別人 → 使役（主語が高貴でも！） - 「しめたまふ」は漢文訓読体に多い形（させる相手がいれば使役+尊敬、いなければ最高敬意）

源氏物語・枕草子の宮中文学に頻出。これを押さえると、敬語表現が一気にクリアになる。

著作権：個別指導塾フィット / 中本裕太